宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

連携型小中一貫教育実践の状況調査：宮崎県高原町における学力向上の取り組みについて

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 宮崎大学教育文化学部
	公開日: 2014-04-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 遠藤, 宏美, 助川, 晃洋
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/4822

宮崎大学教育文化学部紀要　教育科学　第30号（2014）1-27頁

連携型小中一貫教育実践の状況調査
－宮崎県高原町における学力向上の取り組みについて－

遠藤　宏美・助川　晃洋

Measures to Improve Students' Academic Competence in Combined Education in Elementary and Junior High Schools: A Questionnaire in Takaharu Town, Miyazaki Prefecture

Hiromi ENDO and Akihiro SUKEGAWA

Ⅰ　はじめに

近年の我が国では、小中一貫教育が、急速な勢いで普及しつつある。構造改革特別区域制度や教育課程特例校制度を活用して、規制緩和を国に申請し、認可されたことで、学校教育法施行規則や学習指導要領等によらない教育課程の編成・実施が可能となった一部の先進地域はもちろんのこと、上記制度によらずとも、教育の地方分権化や「特色ある学校づくり」の要請を背景に、設置者が主体的に判断して導入を決めた自治体や、さらにはその他の様々なケースなど、まさに全国津々浦々に至るまで、であり、該当する自治体や学校の数を正確に算定することは、もはや相当に困難な状況になっている。そして小中一貫教育は、「質の保証・向上」や「水準確保」を志向しつつ、国家戦略として進められる義務教育改革の試みであると同時に、ローカル・オプティマム（それぞれの地域において最適な状態）の実現に向けた地域教育改革の試みでもある。小中一貫教育は、こうした二つの性格を兼ね備えながら、山積する教育課題の解決に貢献するものとして構想され、実践されなくてはならない。

なかでも、小中一貫教育が真っ先に向き合うべき課題とは何か。この問いに対する回答は、もちろん何通りにも提示可能であるが、最も説得的なものは、児童・生徒の学力向上であろう。学力低下、学力格差、学力の質といった次元が複合して学力問題が構成されている我が国の現状からすれば、何よりこれこそが、国家的な重点課題であると同時に、地域の切実な課題としても認識されるべきだからである。そして管見の限りでは、自治体の教育委員会が作成した基本計画文書やホームページを参照すると、小中一貫教育のねらいの第一、或いは少なくともその上位には、児童・生徒の学力向上に資するため、という趣旨のことが、ほぼ共通に謳われている。新聞や教育雑誌の断片的な紹介記事だけでしか情報を知り得ない自治体にしても、大抵の場合は、これと同様の状況にあることを明瞭に看取することができるか、或いはかなりの確率で、その通りであろうと推測することができる。

しかし、自治体の方針が明らかであるのとは裏腹に、そこにある学校での取り組みについては、一部の例外を除いて、いまだ不分明なままにとどまっているのではないか。小中一貫教育

に関する研究成果は、確かに次々と発表されるようになってきているものの、その多くは、実践のリアリティーに迫り得ていないように思われる。そこで本研究では、（その先に訪問調査を見据えつつ、まずは）学校対象の質問紙調査を行うことによって、小中一貫教育実践における学力向上の取り組みの実態を実証的に把握してみたい。もちろん、こうした調査に際しては、特定の自治体に着目する必要がある。本研究では、それを宮崎県高原町に求める。

高原町は、県南西部、西諸県郡に属する（１町のみ）。宮崎市から西へ約40キロの場所に位置し、都城市と小林市、さらに町域西側が鹿児島県霧島市と境を接している。霧島火山群の麓にあって、町域の半分が高原地帯、もう半分が山林原野で占められている。基幹産業は農業で、なかでも畜産業の割合が高い。2013（平成25）年６月の時点での世帯数は4,069戸、人口は9,629人、いずれも対前月比減で（３戸減、８人減）、町公式ウェブサイト上の統計情報を見る限り、人口減少が長期的に継続してきており、その傾向は、今後も変わらないものと予想される。児童・生徒数も減少しており、必然的に「町内には小規模校が多い」。こうした事情を踏まえて高原町は、「連携型の一貫教育」を推進している。「高原町では、小中連携、小小連携、中中連携の３つの連携を含めて、一貫教育と捉えて」おり、小中連携は中学校区ごとに、小小連携と中中連携は町全体で進められている（同校種間連携については、本研究では考察の埒外に置くことにする）。そこでは、「心身の教育を基盤にした学力の向上とふるさと教育の充実」という「高原町の学校教育目標」に明らかなように、児童・生徒の学力向上（「小中学校９年間の一貫した指導による学力の向上」）が、一つの、そして第一の「ねらい」となっている[(1)]。

では、高原町の連携型小中一貫教育実践においては、児童・生徒の学力向上をめざして、どのような取り組みが行われているのであろうか。この問いに対する十分な回答とみなし得るほどの詳細な報告は、現時点では見当たらない。筆者（遠藤・助川）が入手し得た高原町教育委員会の刊行物にしても、リーフレットや便りの類ばかりで、おそらくは保護者や地域住民を主たる読者として想定したものであるために、あまりにも簡素な記載にとどまっている。やはり町内全小・中学校を対象とした質問紙調査こそが必要であろう。本研究では、校種別と中学校区別に、その結果を報告し、考察を加えることにする。

なお筆者は、高原町とともに西諸県地区を構成する県内２市、すなわち小林市とえびの市においても同様の調査を実施し、その結果を次の２つの論文にまとめている。

遠藤宏美・助川晃洋　「宮崎県小林市の連携型小中一貫教育実践における学力向上の取り組み－質問紙調査による全体状況の把握－」　『宮崎大学教育文化学部紀要（教育科学）』第28号　宮崎大学教育文化学部　2013年３月　pp.19-60.

遠藤宏美・助川晃洋　「連携型小中一貫教育実践における学力向上の取り組み－宮崎県えびの市での質問紙調査から－」　『宮崎大学教育文化学部紀要（教育科学）』第29号　宮崎大学教育文化学部　2013年８月　pp.23-54.

これらと重複する記載内容は、本研究では、あえて簡略化した。あらかじめお断りするとともに、あわせての参照をお願いしたい。また西諸県地区２市１町での調査の総括的考察は、別稿において行う予定である。

Ⅱ　研究の目的と方法

高原町の小・中学校では、連携型小中一貫教育を活かしてどのような学力向上の取り組みが

なされているのかを把握するために、小林市およびえびの市で実施した調査と同様に以下の６点を中心とした質問紙調査を行った。なお、調査票は、調査の対象地域や実施時期の違いを踏まえて最低限の文言の修正を施したことを除き、上記の小林市・えびの市調査と同じ質問や選択肢を用いている。したがって、調査票の構成やそれぞれの質問の意図については、上記拙稿を参照願いたい。

１）自校および中学校区の児童・生徒全体の学力や学習に関する状況を、学校としてどのように認識しているか。
２）各学校の重点目標は何か。また、「知育」、「徳育」、「体育」のうち、最も課題としていることは何か。
３）児童・生徒の学習支援や学力向上に向けて、どのような取り組みを取り入れているか。
４）小中連携を活かしてどのような学習支援・学力向上に向けた取り組みを行っているか。
５）小中一貫教育の仕組みを活かして学力向上に取り組む際、困難を感じていることは何か。
６）学校の教育活動や小中一貫教育に対して、保護者や地域住民から理解や協力を得られているか。

調査の概要は、以下の通りである。調査の実施については高原町教育委員会の全面的な協力を得て行われたことを付記し、感謝を表したい。

＊調査対象（調査票配布対象）：高原町立小学校全４校、高原町立中学校全２校、計６校
＊回答者：学校の運営や小中一貫教育に深く携わっている教員（校長、教頭、教務主任等を想定）。中学校区での取り組みに関して回答を求めた質問に対しては、同一中学校区の他校と相談したり回答を統一したりする必要はないことを申し添えた。
＊有効回答数：６校（有効回答率：100％）。
回答した調査票に加え、可能であれば学校の概要や教育実践について記した資料等を同封しての返送を依頼したところ、２校から学校経営案等の資料の送付があった。
＊調査の方法：学校宛てに調査票を直接郵送し、同封した返送用封筒にて返送を依頼した。
＊調査の期間：平成25年６月下旬から７月中旬

調査対象校の基本属性は、以下の通りである。

①学校数
小学校　…　４校
中学校　…　２校

②中学校区の構成
小学校１校と中学校１校の組み合わせ　…　１中学校区
小学校３校と中学校１校の組み合わせ　…　１中学校区

③学校規模（特別支援学級を除いた学級数）
小学校　６学級（１学年１学級）未満　…　２校
６学級以上12学級未満　…　２校
12学級（１学年２学級）以上　…　０校
中学校　３学級（１学年１学級）未満　…　１校
３学級以上６学級未満　…　０校

６学級（１学年２学級）以上　…　１校

Ⅲ　結果と考察（１）－校種別－

以下では回答結果の中から、小学校と中学校の校種別に特徴的な回答を示し、町全体としてどのような取り組みがなされているのか、校種による違いがあるのかなどを把握する。なお本稿では、結果を把握しやすくするために回答の割合をパーセンテージで示しているが、対象校数が少なく１校あたりの回答が持つ割合が大きくなるため、回答があった学校数を併記する。

用いたデータはその都度提示するが、考察のもととなった資料１「調査票および単純集計結果（校種別）」も適宜、参照願いたい。

（１）学力・学習状況に対する認識

児童・生徒の学力や学習状況の認識について、特徴的な回答を取り上げる。学校全体として、自校の児童・生徒の学力の状況が全国平均と比べてどのような状態にあるか、という問い（Ｑ１）に対しては、小学校では全国平均を「やや上回る」(50.0%：２校）と「やや下回る」(50.0%：２校）とに分かれていた。一方で中学校では２校とも「やや下回る」と回答しており、学校全体として見た場合には、中学校における生徒の学力水準がやや低めであるとみられる。

では、中学校区として見た場合（Ｑ２）はどうであろうか。回答結果を全体的に見てみると、中学校２校は同じ、あるいは近い回答であるのに対し、小学校４校の回答は分散していることが多い。このことについて、小学校と中学校との間で児童・生徒の学力の状況についての基準や認識が異なっていると考えられるほか、中学校区としての回答を求めているものの、特に小学校では「自校の児童・生徒の状況」について回答しているおそれがあり、解釈が難しい。

その中でも小学校と中学校とで回答傾向が似ているのは、「授業に集中できない児童・生徒が多い」と「学習習慣が身についていない児童・生徒が多い」という項目である。どちらも「あてはまらない」(「あまりあてはまらない」または「まったくあてはまらない」と回答、以下同様）という回答であった。またその結果として、「学力不足のために、希望する高校への進学が難しい生徒が多い」という項目についても、両校種とも「あてはまらない」という回答であった。すなわち、高原町の小・中学校では、授業中の集中力散漫や学習習慣の未定着という問題をあまり抱えておらず、高等学校進学に際しても学力面での困難を抱えている生徒が少ない様子が窺える。

（２）重点目標

自校が教育活動を行う上で重点を置いていることを尋ねた結果(Ｑ３、３つまでの複数回答)、小学校・中学校ともに最も多かった回答は、「学校全体としての学力水準を上げること」（小学校75.0%：３校、中学校100.0%：２校）であった。次いで小学校では「すべての児童・生徒に、基礎学力を身につけさせること」(75.0%：３校）が、中学校では「学習習慣を身につけさせ、主体的に学習に取り組む児童・生徒を育むこと」(100.0%：２校）が多かった。両校種とも学習面に重点を置いている学校が多く、それ以外には小学校の50.0%（２校）で「自分に自信や誇りを持てる児童・生徒を育成すること」が、小学校50.0%（２校）と中学校50.0%（１校）で「郷土を愛し、地域に誇りが持てる児童・生徒を育むこと」が選択されたのみである。なお、

「知育」、「徳育」、「体育」のうち、最も課題としていること（Ｑ４）については、すべての小・中学校が「知育」と回答しており、学力・学習面で力を入れていることが窺える。

（３）学力向上に向けた取り組み

学力向上に向けた具体的な取り組みについての回答結果を見てみると（Ｑ５）、小学校の回答は中学校に比べると分散する傾向にあり、校種による違いというよりも学校ごとの違いが大きいようである。強いて挙げるなら、「家庭学習の習慣を身につけさせる指導」をすべての小学校が「積極的に実施している」（「とても積極的に実施している」または「やや積極的に実施している」）と回答していることが、小学校の特徴である。また、50.0%（２校）が「実施していない」と回答した「少人数指導・少人数学習」であるが、当該の小学校も学校規模が小さいため、結果的に「少人数指導・少人数学習」となっていると考えられることを付記しておきたい。反対に、「あまり実施していない」もしくは「実施していない」割合が高いのは、「習熟度別指導」（「あまり実施していない」50.0%：２校、「実施していない」25.0%：１校）や「学力が高い児童・生徒に対して、発展的な学習の機会を用意すること」（「あまり実施していない」75.0%：３校）である。これらのことから、小学校では児童を習熟度別に分けたり発展的な学習を施したりすることよりも[(2)]、少人数であることを活かした指導や家庭学習の習慣を定着させることに力を入れているようであることが見て取れる。

中学校では２校（100.0%）とも、小学校同様に「少人数指導・少人数学習」と、「長期休業中の補習指導」を「やや積極的に実施している」と回答があった。

（４）小中連携を活かした学習支援・学力向上に向けた取り組み

小・中学校が連携して取り組んでいる、児童・生徒の学習支援・学力向上を目指した教育活動はどのようなものであろうか（Q11、表１）。

①教員どうしの連携

「小・中学校間で教員が相互に授業を参観すること」と「中学校区で児童・生徒の学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと」は、すべての小・中学校が実施していると回答していることから、高原町の小・中学校では児童・生徒の学習に関する教員どうしの基本的な連携ができていると見られる。

しかし、小・中学校合同で「評価規準や方法について一貫性の視点から検討すること」（全体：33.3%）や「系統性・一貫性の視点からカリキュラムを検討すること」（全体：16.7%）、「中学校区の教員が合同で、児童・生徒の学力についての分析を行うこと」（全体：33.3%）、「学力面で気になる児童・生徒を特定して、小・中学校合同で支援に当たること」（全体：16.7%）は、全体の半数にも満たない。

②「乗り入れ指導」

他校種の教員が授業を行う「乗り入れ指導」については、「TTとして」（全体：33.3%）、「単独で」（全体：16.7%）と全体として実施率が低い。ましてや「通常の授業以外で他校種の教員が授業を行うこと」は、どの学校も実施していない。また、「乗り入れ指導」を円滑にすすめる工夫の一つである「中学校区で、小・中学校間の校時程の調整を図ること」も、全体で33.3%

の実施にとどまっている。なお、別の質問への回答から補足しておくと、「小学校教員が中学生に対して行う授業」はなく（Ｑ８、小学校全４校が「ない」と回答)、「中学校教員が小学生に対して行う授業」は中学校１校が３学年５教科等に展開しているのみであった（Q10)。このことからも、他校種の教員による「乗り入れ指導」は盛んではなく、特に小学校から中学校への乗り入れが積極的ではない様子が窺える。

ただし、「乗り入れ指導」については校種別に見るよりも中学校区別に検討するほうが有意義であるだろう。中学校区別の検討は、「Ⅳ　結果と考察（２)」を参照願いたい。

③指導の一貫性や系統性

「授業時の態度や学習の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること」や「家庭学習のあり方に一貫性が持てるよう、小・中学校間で調整すること」は、全体で83.3%が実施しているほか、「中学校区で共通の『家庭学習の手引き』を作成するなどして、家庭学習の指導を統一したり系統性を図ったりすること」や「校則や学校生活の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること」も、全体で66.7%が実施しており、中学校区で

表１　小中連携を活かした学力向上・学習支援に向けた取り組みの実施率（全体、校種別、単位：%）

小中連携を活かした学力向上・学習支援に向けた取り組み	全体	小学校 (N=4)	中学校 (N=2)
小・中学校間で教員が相互に授業を参観すること	100.0	100.0	100.0
中学校区で児童・生徒の学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと	100.0	100.0	100.0
授業時の態度や学習の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	83.3	75.0	100.0
家庭学習のあり方に一貫性が持てるよう、小・中学校間で調整すること	83.3	75.0	100.0
中学校区で共通の「家庭学習の手引き」を作成するなどして、家庭学習の指導を統一したり系統性を図ったりすること	66.7	75.0	50.0
校則や学校生活の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	66.7	75.0	50.0
小・中学校合同で、評価規準や方法について一貫性の視点から検討すること	33.3	50.0	0.0
他校種の教員がTTとして、授業に入ること	33.3	25.0	50.0
中学校区の教員が合同で、児童・生徒の学力についての分析を行うこと	33.3	25.0	50.0
中学校区で、小・中学校間の校時程の調整を図ること	33.3	25.0	50.0
小・中学校合同で、系統性・一貫性の視点からカリキュラムを検討すること	16.7	25.0	0.0
学習や生活に関する家庭向けの通信を、中学校区として発行すること	16.7	25.0	0.0
他校種の教員が単独で、授業を行うこと	16.7	0.0	50.0
学力面で気になる児童・生徒を特定して、小・中学校合同で支援に当たること	16.7	0.0	50.0
通常の授業以外で他校種の教員が授業を行うこと	0.0	0.0	0.0

指導の系統性を意識し、一貫性のあるものにする取り組みはかなり行われている。

しかし、先に触れたように、「小・中学校合同で、評価規準や方法について一貫性の視点から検討すること」や「小・中学校合同で、系統性・一貫性の視点からカリキュラムを検討すること」といった、指導方法やカリキュラムの系統性や一貫性の検討はあまりなされていないようである。また、「学習や生活に関する家庭向けの通信を、中学校区として発行すること」も全体で16.7％と低い水準にとどまっている。

（5）小中一貫教育に取り組む中で感じる困難

今回の調査の結果、全体的に見ると高原町の小・中学校では、小中一貫の仕組みを活かした学力向上の取り組みの中での困難はあまり感じていない様子である（Q15）。特に中学校では、すべての学校（２校）ともに困難を「感じている」（「かなり感じている」または「少し感じている」）と回答した項目がない。強いて、小学校で困難と感じられている事項を抜き出すと、「小学校と中学校との距離が離れていて、行き来に時間がかかること」（「少し感じている」75.0％：３校）、「小・中学校間で、連絡を取り合ったり情報を共有したりする機会が少ないこと」、「小・中学校の教員が集まって話し合う時間が確保しにくいこと」、「他校種の授業を参観したり、乗り入れ授業を行ったりするための時間が確保できないこと」（いずれも「かなり感じている」25.0％：１校、「少し感じている」25.0％：１校）であった。小学校では、中学校との間を行き来する時間を確保しにくいことが困難と感じられやすいようである。

反対に、すべての小・中学校が困難を「感じていない」（「あまり感じていない」または「ほとんど感じていない」と回答、以下同様）のは、「異動があるため、児童・生徒を長期にわたって指導することができないこと」と「小中一貫教育に関心がなかったり、理解がなかったりする教職員がいること」である。この結果から、高原町では小中連携による一貫教育の理念が浸透し、児童・生徒を継続的に指導する体制が整っている可能性が高いと考えられよう。また、全ての学校ではないものの、「他校種の児童・生徒理解が難しいこと」や「小・中学校間で、評価の考え方や方法が異なること」、「小・中学校の教員がもつ、それぞれの指導観や子ども観を理解するのに時間がかかること」について、困難を「感じていない」学校が多く、他校種の児童・生徒や教員文化の違いを理解するという壁は、おおむね乗り越えられているようである。

興味深いのは、「他校種への乗り入れ授業をすることができる教員の人数が不足していること」や「他校種への乗り入れ授業を行うための、教員の知識・技術や専門性が不足していること」といった、「乗り入れ授業」を行う教員に関する困難も少ないことである。先に触れたように高原町の小・中学校では、他校種の教員による「乗り入れ授業」があまり盛んではない。そのことを踏まえると、この結果は、「乗り入れ授業」の実施を阻む物理的な「困難がない」のではなく、「乗り入れ授業」を日常的に実施していないが故に、「困難を感じる余地がない」ことを意味すると考えられる。

（6）学校や教育に対する保護者の理解や協力

高原町の小・中学校では、学校の教育活動や家庭学習に対する保護者の理解や協力（Q17）はどのくらい得られているのであろうか。すべての小・中学校で「授業参観や学級懇談に出席する保護者」は「多いと思う」（「かなり多いと思う」または「やや多いと思う」）と回答し、「学校の教育活動や行事等に協力する保護者」も多いようである。しかし、「児童・生徒の家庭学習

に協力する保護者」が「多いと思う」のは小・中学校ともに半数にとどまり、家庭学習への協力は十分に得られていないようである。また、「小中一貫教育に対して理解のある保護者」が「多いと思う」という回答も、小学校の75.0%（３校）、中学校の50.0%（１校）にとどまっており、高原町が進める小中一貫教育に対する家庭での理解も、いま一歩不足しているとみられる。

Ⅳ　結果と考察（２）－中学校区別－

２つの中学校区別に、校区内の児童・生徒の学力の実態をどのように認識し、そこから設定されうる課題に対して小･中学校が連携してどのような取り組みを行っているのかを概観する。用いるデータは、今回の質問紙調査の結果（資料２「回答一覧」および資料３「自由記述一覧」）に加え、児童・生徒数や教職員数、学校の位置関係などの公表されている基本情報である。

以下の記述では、学校名は匿名とし、中学校については大文字のアルファベットで、小学校については対応する小文字のアルファベットで表記する[(3)]。１つの中学校区に複数の小学校がある場合には、アルファベットと数字を組み合わせて区別することとする。

（１）Ｎ中学校区

Ｎ中学校区は、Ｎ中学校とｎ１、ｎ２、ｎ３の３つの小学校とからなる「３小・１中」の組み合わせである。Ｎ中学校との距離は、ｎ１小学校が約1.2km、ｎ２小学校が約５km、ｎ３小学校が約5.5kmであり、ｎ２小学校とｎ３小学校との間にＮ中学校とｎ１小学校があるという位置関係である。ｎ２小は各学年１学級、ｎ３小は複式学級を編制するほどの小規模校である。

中学校区内の児童・生徒の学力に関する認識（Ｑ２）は、「学力が高い児童・生徒が多い」にＮ中が「あまりあてはまらない」と回答する一方、小学校３校は「ややあてはまる」と回答し、小学校と中学校とで一致しない。同様に、「学力が低い児童・生徒が多い」と「全体として学力水準が低い」に対しても、中学校は「ややあてはまる」、小学校は２校が「あまりあてはまらない」、１校が「まったくあてはまらない」と回答し、小学校と中学校とがほぼ正反対の認識である。これらを総合すると、Ｎ中学校区の児童・生徒全体の学力について、小学校では「高め」の、中学校では「低め」の認識を有しているということになる。このことは、「小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い」に、小学校３校が「あてはまらない」（「あまりあてはまらない」または「まったくあてはまらない」と回答、以下同様）、中学校が「ややあてはまる」と回答したことにもあらわれている。小学校では子どもに学習内容を十分に理解させたうえで中学校に進学させているつもりであっても、中学校ではそのように捉えていないというギャップが窺える。

このように、小学校と中学校とで児童・生徒の学力実態の把握に違いが見られるＮ中学校区であるが、「授業に集中できない児童・生徒が多い」や「学習習慣が身についていない児童・生徒が多い」、「学力不足のために希望する高校への進学が難しい児童・生徒が多い」という項目に対し、すべての小・中学校が「あてはまらない」とほぼ共通の認識を持っている。「当該学年の学習についていけない児童・生徒」や「授業中落ち着きのない児童・生徒」（Q16）も「ほとんどいない」か「あまり多くない」。これらのことには、児童・生徒の学習支援や学力向上に向け、「授業時の態度や学習の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること」や「家庭学習のあり方に一貫性が持てるよう、小・中学校間で調整すること」に４校とも取り

組んでいると回答していることが寄与していると考えられる（Q11）。授業を聞く態度や学習習慣の定着という学習の土台づくりに小・中学校が連携して取り組むことにより、当該学年の学習内容の理解を促し、その蓄積の成果として高校進学に足りる学力を形成することにつながっているのであろう。

Ｎ中学校区の学力面での課題は、３つの小学校の間で学習・学力の状況やその把握に差が見られることも挙げられる。自校の児童の学力（Ｑ１）について、ｎ１・ｎ２小が「全国平均をやや上回る」一方、ｎ３小は「全国平均をやや下回る」状況であるという。また、「中学校区内の複数の小学校間で、学力水準に差がある」（Ｑ２）についても、ｎ１・ｎ２小が「あてはまらない」（「まったくあてはまらない」または「あまりあてはまらない」）と回答したのに対し、ｎ３小は「ややあてはまる」と認識が異なっている。これらのことから、ｎ１・ｎ２小に比べｎ３小の学力水準がやや低めであり、そのことをｎ３小では明確に自覚しているということが読み取れよう。これら３校では「小学校どうしで交流学習を行うこと」（Q11）などの交流が盛んに行われている[(4)]ようであり、このような取り組みが学校間の学力水準の差の解消に役立つものであることを期待したい。

Ｎ中学校区の小・中学校が連携して取り組んでいること（Q11）として、「小・中学校間で教員が相互に授業を参観すること」や「中学校区で児童・生徒の学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと」といった教員の研修にかかわることを、４校が共通に挙げている。しかしＮ中学校区では、コンスタントな「乗り入れ授業」は実施されていないようである（Ｑ８、Q10、Q11）。「小学校と中学校との距離が離れていて、行き来に時間がかかること」（Q15）について、Ｎ中が「かなり感じている」、小学校３校が「少し感じている」と回答していることから推測されるように、連携する小学校が３校あり、そのうち２校はＮ中学校との距離があることが「乗り入れ授業」に取り組みにくい要因であると考えられる。

Ｎ中学校区の４校では、「学校の教育活動や行事等に協力する保護者」や「児童・生徒の家庭学習に協力する保護者」、「授業参観や学級懇談に出席する保護者」が多いようであり（「かなり多いと思う」または「やや多いと思う」と回答）、児童・生徒の学習への協力が多く得られていると考えられる（Q17）。一方、「小中一貫教育に対して理解のある保護者」は学校による差が窺える（ｎ１小「かなり多いと思う」、ｎ２小「やや多いと思う」、Ｎ中・ｎ３小「あまり多くないと思う」）。保護者のみならず、地域住民の理解や協力についても「多くないと思う」（「あまり多くないと思う」または「ほとんどないと思う」）という回答が散見される。

（２）Ｏ中学校区

Ｏ中学校区は、Ｏ中学校とｏ小学校の「１小・１中」の組み合わせであり、Ｏ中とｏ小とは隣接している。両校とも複式学級を編制しており、中学校区の全児童・生徒数は60名ほどと小規模である。

児童・生徒の学力の状況については、小・中学校とも「全国平均をやや下回る」（Ｑ１）と一致し、特に「学力が高い者と低い者との差が大きい」（Ｑ２）という認識のようである（Ｏ中「ややあてはまる」、ｏ小「とてもよくあてはまる」と回答）。これは、「中学校区の教員が合同で、児童・生徒の学力についての分析」（Q11）を行っていることによるものであろう。ただ、「学力が高い児童・生徒が多い」（Ｏ中「ややあてはまる」、ｏ小「あまりあてはまらない」）、「学力が低い児童・生徒が多い」（Ｏ中「あまりあてはまらない」、ｏ小「ややあてはまる」）、「全体と

して学力水準が低い」（Ｏ中「あまりあてはまらない」、ｏ小「ややあてはまる」）、「小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い」（Ｏ中「あまりあてはまらない」、ｏ小「ややあてはまる」）などの回答結果を見ると、中学校よりも小学校のほうが、児童・生徒の学力・学習状況をやや厳しく捉えているようである。

とはいうものの、２校とも「授業に集中できない児童・生徒が多い」、「学習習慣が身についていない児童・生徒が多い」、「学力不足のために、希望する高校への進学が難しい生徒が多い」のいずれにも「あてはまらない」（「あまりあてはまらない」または「まったくあてはまらない」）と回答しているほか、「当該学年の学習についていけない児童・生徒」や「授業中落ち着きのない児童・生徒」も多くない（「ほとんどいない」または「あまり多くない」と回答）ようである（Q16）。学力向上に向け、両校とも「家庭学習の習慣を身につけさせる指導」（Ｑ５）を「やや積極的に実施している」ことが功を奏しているようである。

ほかにもＯ中学校区では、少規模であることや隣接していることを活かし、「少人数指導・少人数学習」（Ｑ５）を「やや積極的に実施している」ほか、「中学校区で小・中学校間の校時程の調整を図ること」や「他校種の教員がＴＴとして授業に入ること」といった取り組みを行っている（Q11）。これらのことも、児童・生徒の学力を把握し、小・中学校が連携して学力向上に向けて取り組むことに寄与していると考えられる。

小・中学校が隣接していることにより、「小・中学校間で教員が授業を参観すること」や「中学校区で児童・生徒の学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと」（Q11）を実施しやすいようである（自由記述の回答によれば、小中合同の職員研修を「月１～２回」、「年10回程度」実施しているとのことである）。また、「小・中学校間で、連絡を取り合ったり情報を共有したりする機会が少ないこと」や「小学校と中学校との距離が離れていて、行き来に時間がかかること」、「小・中学校の教員が集まって話し合う時間が確保しにくいこと」、「他校種の授業を参観したり、乗り入れ授業を行ったりするための時間が確保できないこと」（Q15）といった、小学校と中学校との間の物理的な距離は「感じていない」（「ほとんど感じていない」または「あまり感じていない」と回答、以下同様）。教員どうしの交流や互いの児童・生徒への指導を通じて、「他校種の児童・生徒理解が難しいこと」や、「小・中学校間で、評価の考え方法や方が異なること」、「小・中学校の教員が持つ、それぞれの指導観や子ども観を理解するのに時間がかかること」といった、いわゆる小学校文化・中学校文化の違いを理解することにも、困難を「感じていない」ようである。「１小・１中」の組み合わせであることも影響しているのか、保護者や地域住民の、教育活動や行事等への協力や小中一貫教育に対する理解（Q17）も「多い」（「かなり多いと思う」または「やや多いと思う」）ようであり、保護者や地域の期待や支援・協力を受けながら、小中一貫教育が進められていることが窺える。

しかしながら、「児童・生徒の家庭学習に協力する保護者」（Q17）は両校とも「あまり多くないと思う」と回答しているほか、ｏ小学校では「教育熱心な保護者」が「あまり多くない」ようである。そのため、「『家庭学習の手引き』を作成し、家庭に配付している」ほか「『ノーメディア（ＴＶ、ゲーム）デー』を設定し、家庭への意識づけを行っている」（Q14：自由記述より）というような、家庭への働きかけに力を入れているようである。

Ⅴ　おわりに

本稿では、高原町の連携型小中一貫教育実践における学力向上の取り組みについて、町内全小・中学校を対象とした質問紙調査の結果から、小・中学校の校種別および中学校区別に現状の把握を試みた。その結果、次のような状況を把握することができた。

高原町の児童・生徒は、概して授業に集中できていたり学習の習慣が身についていたりと、学習に取り組む基本的な姿勢が形成されているようである。これらは、中学校区の児童・生徒について学力を分析することや、授業時の態度や家庭学習のあり方に一貫性を持てるよう検討することなど、中学校区ごとに行っている取り組みが功を奏していると考えられる。ところが「小中一貫」に着目した場合、他校種の教員による授業参観や小・中学校合同の職員研修など、小中一貫教育の体制は整っているものの、一般に小中一貫（連携）教育として知られる典型的な取り組み―他校種への「乗り入れ授業」の実施や系統性・一貫性の視点からのカリキュラムの検討など―は、あまり積極的には行われていない。このことは、高原町が小中一貫教育に消極的であるということではなく、中学校区内の学校数や児童・生徒数などの面で大きく異なる中学校区ごとに、その地域性や教育課題に応じて無理のない形で小学校と中学校とが連携を図るという、高原町ならではの小中一貫教育の在り方を示しているものといえよう。

さらに高原町では小中連携のほか、小学校どうしの連携（小小連携）および中学校どうしの連携（中中連携）にも取り組んでおり、学年ごとに教科等の学習活動や社会見学等を合同で行っている（5）。町全体の学校数が少ないからこそ可能であることとはいえ、小規模校のデメリットを解消するとともに、小学校段階・中学校段階での学校間格差を減らし、町全体で学力向上を図っていこうとする姿勢が見受けられる。このことからも、高原町では小中一貫で教育を行うことが「目的」なのではなく、小中一貫教育を「手段」として活用しながら学力向上に取り組んでいると言えるのではないだろうか。

ところで、本調査および本稿をもって西諸県地区２市１町すべての自治体の「小中一貫教育実践校における学力向上の取り組み」の状況を把握し終えた。その結果、西諸県地区における小中一貫教育の実践は、連携型による取り組みであることや導入時期もほぼ同じであることなどの類似性が認められる一方、具体的な取り組みや実践上の課題などに違いが見られた。稿を改めて、２市１町の比較検討を踏まえた総括的考察を行うこととしたい。

注

（1）「高原町一貫教育～小中連携・小小連携・中中連携～」　高原町教育委員会　2012（平成24）年２月

（2）なお、小学校で「習熟度別指導」を実施している学校でも、３～６年生の算数にのみ取り入れており、「習熟度別指導」が主たる指導方法というわけではない。

（3）学校名を示すアルファベットは、小林市調査でＡからＩまで、えびの市調査でそれに続くＪからＭまでを用いた（小学校は対応する小文字のアルファベットを用いた。Ｉに挙げた２つの拙稿を参照）。本稿ではそれらとの混同を避けるため、続くＮとＯを振ることとした。

（4）小学校どうしの交流授業（小小連携）は、Ｎ中学校区の３校だけでなく、高原町立小学校全４校でも行われている。

（5）前掲（１）および「高原町一貫教育～小中連携・小小連携・中中連携・高原子ども会議・一貫教育保護者部会～」　高原町教育委員会　2013（平成25）年３月

資料１　調査票および単純集計結果（校種別）

小中一貫教育実践校における学力向上の取り組みに関する調査

この調査は、小中一貫教育を実践している小・中学校ならびに中学校区単位で、児童・生徒の学力向上を目指してどのような取り組みを行っているかを明らかにするために、高原町教育委員会のご理解・ご協力を得て、宮崎大学小中一貫教育支援研究プロジェクトが実施するものです。調査は高原町の町立小学校および町立中学校のすべてを対象としております。校務でご多忙のところにご面倒をおかけすることとなり大変恐縮ですが、調査の趣旨をご理解の上、ご協力をいただければ幸いです。

＜お答えいただく上での注意＞

１．質問には、校長先生、教頭先生、教務主任の先生など、**学校の運営や小中一貫教育に深く携わっておられる先生**がご回答ください。先生方の間で相談してご記入いただいてもかまいません。なお、ご回答くださる先生のお名前をご記入いただく必要はありませんが、後日、回答についての確認や連絡をとる必要が生じたときのために、お立場（役職名）のみお知らせください。

２．一部、昨年度までの指導実施状況や卒業生を想定してお答えいただく質問がありますが、基本的には今年度（平成 25 年度）の児童・生徒の状況や学校の方針等についてご回答ください。また、回答にあたって、中学校区で相談する時間をとったり、回答を統一したりする必要はございません。質問によっては、意見や考えをうかがうものもありますが、記入される方の主観的な判断でお答えくださって結構です。

３．ご記入いただいた調査票は、同封の返信用レターパックに入れ**７月１２日（金）**までにご返送をお願いいたします。その際、学校要覧や学校経営案など、貴校の概要や教育実践について記した資料、貴校の記録等で頂戴できるものがありましたら、同封していただけますと幸いです。なお、パソコンを利用して全部あるいは一部を記入していただくことも可能です。その場合、お手数ですが、下記の担当者までメールでお知らせください。

４．調査の結果は、学会や小中一貫教育フォーラムで発表する際に報告したり、論文や報告書等に掲載したりすることを予定しておりますが、研究以外に用いることは決してありません。調査の実施・公表にあたっては、どの学校がどのような回答をしたのか特定できないよう配慮し、情報の保護に万全の注意を払います。この調査に回答していただくことによって、貴校や先生方にご迷惑をおかけすることはありませんので、ご安心ください。

５．本調査についてのお問い合わせは、下記の担当者までお願いいたします。

助川　晃洋（宮崎大学教育文化学部 准教授）
TEL/FAX　●●●●-●●-●●●●　E-mail：●●●●●●@cc.miyazaki-u.ac.jp

＜学校名と、貴校が属する中学校区をご記入ください＞

貴校の名称	小学校　４校 中学校　２校	貴校が属する中学校区 ２　中学校区

＜調査票にご記入くださる先生の役職名をお答えください＞　N=6

１．校長　16.7%（1 校）　２．教頭　50.0%（3 校）　３．教務主任　16.7%（1 校）
４．小中一貫教育担当　16.7%（1 校）　５．その他　0.0%

◆ 以下、特に表記がない場合は、小学校：N=4、中学校：N=2

Ｑ１．貴校に在籍する児童・生徒についてお尋ねします。貴校の児童・生徒の学力の状況は、全体として見るとどのような状態にありますか。次の選択肢の中から、おおむね最も近いと考えられるものをひとつ選び、番号に○をつけてください。

１．全国平均を、大幅に上回る	小： 0.0%	中： 0.0%
２．全国平均を、やや上回る	小： 50.0%（2校）	中： 0.0%
３．全国平均並み	小： 0.0%	中： 0.0%
４．全国平均を、やや下回る	小： 50.0%（2校）	中：100.0%（2校）
５．全国平均を、大幅に下回る	小： 0.0%	中： 0.0%

Ｑ２．貴校が属する中学校区の児童・生徒全体の状況についてお尋ねします。中学校区の児童・生徒の学習・学力はどのような実態ですか。以下にあげる事項について、中学校区の児童・生徒にあてはまるものをひとつずつ選び、その番号に○をつけてください。

	あてはまる とてもよく	あてはまる やや	あてはまらない あまり	あてはまらない まったく	わからない
Ａ．学力が高い児童・生徒が多い	小： 0.0 中： 0.0	75.0 50.0	25.0 50.0	0.0 0.0	0.0 0.0
Ｂ．学力が低い児童・生徒が多い	小： 0.0 中： 0.0	25.0 50.0	50.0 50.0	25.0 0.0	0.0 0.0
Ｃ．学力が高い者と学力が低い者との差が大きい	小: 25.0 中： 0.0	50.0 100.0	0.0 0.0	25.0 0.0	0.0 0.0
Ｄ．全体として学力水準が低い	小： 0.0 中： 0.0	25.0 50.0	50.0 50.0	25.0 0.0	0.0 0.0
Ｅ．授業に集中できない児童・生徒が多い	小： 0.0 中： 0.0	0.0 0.0	75.0 50.0	25.0 50.0	0.0 0.0
Ｆ．学習意欲が高い児童・生徒が多い	小: 25.0 中： 0.0	50.0 50.0	25.0 50.0	0.0 0.0	0.0 0.0
Ｇ．学習習慣が身についていない児童・生徒が多い	小： 0.0 中： 0.0	0.0 0.0	75.0 100.0	25.0 0.0	0.0 0.0
Ｈ．家庭学習に積極的に取り組む児童・生徒が多い	小: 25.0 中： 0.0	25.0 50.0	50.0 50.0	0.0 0.0	0.0 0.0
Ｉ．小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い	小： 0.0 中： 0.0	25.0 50.0	50.0 50.0	25.0 0.0	0.0 0.0
Ｊ．学力不足のために、希望する高校への進学が難しい生徒が多い(中学校区の生徒についてお答えください)	小： 0.0 中： 0.0	0.0 0.0	75.0 100.0	25.0 0.0	0.0 0.0
Ｋ．中学校区内の複数の小学校間で、学力水準に差がある（中学校区に属する小学校が１校のみの場合、回答不要） ※ 小：N=3、中：N=1	小： 0.0 中： 0.0	33.3 100.0	33.3 0.0	33.3 0.0	0.0 0.0

Ｑ３．貴校が教育活動を行う上で重点を置いていることには、どのようなことがありますか。次のうち、学校として特に重点を置いていることを**３つまで**選び、番号に○をつけてください。（**複数回答**）

	小学校	中学校
１．すべての児童・生徒に、基礎学力を身につけさせること	75.0	50.0
２．学校全体としての学力水準を上げること	75.0	100.0
３．学習習慣を身につけさせ、主体的に学習に取り組む児童・生徒を育むこと	50.0	100.0
４．基本的な生活習慣を身につけさせること	0.0	0.0
５．自分に自信や誇りを持てる児童・生徒を育成すること	50.0	0.0
６．児童・生徒が望ましい人間関係を築くことができるようすること	0.0	0.0
７．郷土を愛し、地域に誇りが持てる児童・生徒を育むこと	50.0	50.0
８．すべての児童・生徒に、体力テストで一定水準の体力をつけさせること	0.0	0.0
９．正しい食習慣を確立させ、健全な身体を育むこと	0.0	0.0
10．生徒指導上の問題がない、落ち着いた学校生活を送らせること	0.0	0.0

Ｑ４．貴校において、「知育」、「徳育」、「体育」のうち、最も課題としていることはどれですか。**いずれかひとつ**の番号に○をつけてください。

１．知育	小：100.0	中：100.0
２．徳育	小：　0.0	中：　0.0
３．体育（食育を含む）	小：　0.0	中：　0.0

Ｑ５．貴校では、子どもの学力向上に向けて次のような取り組みをどれくらい積極的に実施していますか。それぞれについてあてはまる番号ひとつずつに、○をつけてください。

	実施しているとても積極的に	実施しているやや積極的に	実施していないあまり	実施していない
Ａ．放課後や休み時間等の補習指導	小：0.0 中：0.0	50.0 50.0	25.0 50.0	25.0 0.0
Ｂ．長期休業中の補習指導	小：0.0 中：0.0	50.0 100.0	25.0 0.0	25.0 0.0
Ｃ．習熟度別指導	小：25.0 中：0.0	0.0 50.0	50.0 50.0	25.0 0.0
Ｄ．少人数指導・少人数学習	小：25.0 中：0.0	25.0 100.0	0.0 0.0	50.0 0.0
Ｅ．学力が高い児童・生徒に対して、発展的な学習の機会を用意すること	小：0.0 中：0.0	25.0 50.0	75.0 50.0	0.0 0.0
Ｆ．自校の教員を活用したＴＴによる授業	小：50.0 中：0.0	25.0 50.0	0.0 0.0	25.0 50.0
Ｇ．ＩＣＴを活用した授業を行うこと	小：50.0 中：0.0	25.0 50.0	25.0 50.0	0.0 0.0
Ｈ．家庭学習の習慣を身につけさせる指導	小：50.0 中：0.0	50.0 50.0	0.0 50.0	0.0 0.0

ほかに、貴校が学力向上を目指して行っている取り組みがありましたら、具体的にお教えください。

※ 省略（資料３参照）

小学校にお尋ねします。（中学校は４ページの**Ｑ９**にお進みください。）

◆ **このページのＱ６～Ｑ８につきましては、実施計画などの関連資料を添付することにより、回答に代えていただくことも可能です。**

Ｑ６．今年度、貴校では教科担任制を取り入れている学年・教科等はありますか。下の表のうち、教科担任制を取り入れている学年および教科等のマスに○をご記入ください。

	国語	社会	算数	理科	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語活動
１年生	0.0		0.0		25.0	0.0		0.0	
２年生	0.0		25.0		25.0	0.0		0.0	
３年生	25.0	25.0	0.0	50.0	25.0	0.0		25.0	
４年生	0.0	25.0	0.0	50.0	50.0	0.0		0.0	
５年生	25.0	25.0	0.0	50.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0
６年生	0.0	0.0	25.0	50.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0

Ｑ７．貴校では、習熟度別授業を取り入れていますか。あてはまるほうの番号に○をつけてください。

１．取り入れている　25.0 →下の**ＳＱ７**にお答えください。

２．取り入れていない　75.0 →**Ｑ８**へお進みください。

ＳＱ７．上の質問で「１．取り入れている」と回答した小学校にお尋ねします。下の表のうち、習熟度別授業を取り入れている学年および教科のマスに○をご記入ください。(N=1)

	国語	社会	算数	理科	その他の教科
１年生					
２年生					
３年生			○		
４年生			○		
５年生			○		
６年生			○		

Ｑ８．今年度、通常の授業において、貴校の教員が**中学生**に対して授業を行う機会（単独かＴＴかを問いません）はあります（ありました）か。あてはまるほうの番号に○をつけてください。

１．ある（あった）　0.0 →下の**ＳＱ８**にお答えください。

２．ない（なかった）　100.0 →５ページの**Ｑ11**へお進みください。

ＳＱ８．上の質問で「１．ある（あった）」と回答した小学校にお尋ねします。下の表のうち、貴校の教員が中学生に対して授業を行う教科と学年および頻度をお教えください（頻度は、実施している学年・教科のマスに、「週１時間」「学期に１回」などとご記入ください。）。

	国語	社会	数学	理科	英語	その他の教科
中学１年生						
中学２年生						
中学３年生						

中学校にお尋ねします。（小学校は、５ページの**Q11** にお進みください。）　(N=2)

◆ **このページのＱ９～Q10 につきましては、実施計画などの関連資料を添付することにより、回答に代えていただくことも可能です。**

Ｑ９．貴校では、習熟度別授業を取り入れていますか。あてはまるほうの番号に○をつけてください。

１．取り入れている　50.0　→下の**ＳＱ９**にお答えください。

２．取り入れていない　50.0　→**Q10** へお進みください。

ＳＱ９．上の質問で「１．取り入れている」と回答した中学校にお尋ねします。下の表のうち、習熟度別授業を取り入れている学年および教科のマスに○をご記入ください。　(N=1)

	国語	社会	数学	理科	英語	その他の教科
中学１年生			○			
中学２年生			○			
中学３年生			○		○	

Q10. 今年度、通常の授業において、貴校の教員が**小学生**に対して授業を行う機会（単独かＴＴかを問いません）はあります（ありました）か。あてはまるほうの番号に○をつけてください。

１．ある（あった）　50.0　→下の**ＳＱ10**にお答えください。

２．ない（なかった）　50.0　→５ページの**Q11** へお進みください。

ＳＱ10. 上の質問で「１．ある」と回答した中学校にお尋ねします。下の表のうち、貴校の教員が小学生に対して授業を行う教科等と学年および頻度をお教えください（頻度は、実施している学年・教科等のマスに、「週１時間」「学期に１回」などとご記入ください。）。　(N=1)

	国語	社会	算数	理科	その他の教科等
１年生					
２年生					
３年生	**週１時間**	**週１時間**			
４年生			**週１時間**		
５年生					
６年生				**週１時間**	**英語：週１時間**

すべての小学校・中学校にお尋ねします。

Q11. 貴校および中学校区では、児童・生徒の学習支援や学力向上に向けて、小・中学校が連携して次のようなことを実施していますか。**実施しているものすべて**の番号に○をつけてください。

	小学校	中学校
1．小・中学校間で教員が相互に授業を参観すること	100.0	100.0
2．他校種（小学校⇔中学校）の教員がＴＴとして、授業に入ること	25.0	50.0
3．他校種（小学校⇔中学校）の教員が単独で、授業を行うこと	0.0	50.0
4．通常の授業以外（サマースクールなど）で他校種（小学校⇔中学校）の教員が授業を行うこと（ＴＴ、単独を問わず）	0.0	0.0
5．中学校区で児童・生徒の学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと	100.0	100.0
6．中学校区の教員が合同で、児童・生徒の学力についての分析を行うこと	25.0	50.0
7．学力面で気になる児童・生徒を特定して、小・中学校合同で支援に当たること	0.0	50.0
8．小・中学校合同で、系統性・一貫性の視点からカリキュラムを検討すること	25.0	0.0
9．小・中学校合同で、評価規準や方法について一貫性の視点から検討すること	50.0	0.0
10. 中学校区で、小・中学校間の校時程の調整を図ること	25.0	50.0
11. 授業時の態度や学習の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	75.0	100.0
12. 校則や学校生活の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	75.0	50.0
13. 家庭学習のあり方に一貫性が持てるよう、小・中学校間で調整すること	75.0	100.0
14. 中学校区で共通の「家庭学習の手引き」を作成するなどして、家庭学習の指導を統一したり系統性を図ったりすること	75.0	50.0
15. 学習や生活に関する家庭向けの通信（おたより）を、中学校区として発行すること	25.0	0.0
＊ 次の 16～18 は、**小学校**のみお答えください。 (N=4)		
16. 中学校区の小学校どうしで交流学習を行うこと（小・小連携）(N=3)	75.0	－
17. 中学校進学前の児童に、中学校の学習で必要な基礎的・基本的な事項を確認させること	25.0	－
18. 卒業させた児童について、中学校と連絡を取り合って学習をサポートすること	0.0	－
＊ 次の 19～22 は、**中学校**のみお答えください。 (N=2)		
19. 中学校進学前に学力面で身につけておいてほしいことを、小学校へ伝えること	－	100.0
20. 学力面で気になる生徒について、生徒の出身小学校と連絡を取り合うこと	－	100.0
21. 小学校の保護者に対し、中学校での学習や生活について中学校の教員が説明をすること	－	100.0
22. 長期休業中などに、中学生が小学生の学習をサポートする活動を行うこと	－	0.0

上記の回答への補足や、そのほかに貴校および中学校区が連携して学力向上を目指している取り組みがありましたら、具体的にお教えください。

（記述なし）

Q12. 貴校および中学校区では、小学校から中学校への「進学」に際し、学習状況や学力実態に関してどのような引き継ぎを行っていますか。その内容や様式について、具体的にお教えください。

※ 省略（資料３参照）

Q13. 中学校区の児童・生徒の学習や学力について、小・中学校の教職員の間では日常的にどのような機会に、どのような情報交換がなされていますか。情報交換の機会やその頻度、情報の内容などについて、具体的にお教えください。

※ 省略（資料３参照）

Q14. 貴校では、新学習指導要領を踏まえて「確かな学力」を育成するために、**小中一貫教育を通して**どのような取り組みを行っていますか。貴校での取り組みについて、以下に具体的にご記入ください。

＜基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるために＞

例）中学校入学後に、小学校で学習した内容を復習する機会を設けている。

※ 省略（資料３参照）

＜思考力・判断力・表現力等を育成するために＞

例）９年間のスパンで論述やレポートに力を入れた指導をしている。

※ 省略（資料３参照）

＜学習意欲を向上させるために＞

例）小学校において、中学校で学習する内容を先取りした授業を行い、学習への意欲を高めている。

※ 省略（資料３参照）

＜学習習慣を身につけさせるために＞

例）望ましい家庭学習の時間や内容について、９年間分の表を作り、家庭に配付している。

※ 省略（資料３参照）

Q15. 貴校では、小中一貫教育の仕組みを活かして学力向上に取り組む際、次のようなことをどれくらい感じていますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	かなり感じている	少し感じている	あまり感じていない	ほとんど感じていない
A．小・中学校間で、連絡を取り合ったり情報を共有したりする機会が少ないこと	小：25.0 中：0.0	25.0 50.0	50.0 50.0	0.0 0.0
B．小学校と中学校との距離が離れていて、行き来に時間がかかること	小：0.0 中：50.0	75.0 0.0	0.0 0.0	25.0 50.0
C．小・中学校の教員が集まって話し合う時間が確保しにくいこと	小：25.0 中：0.0	25.0 0.0	50.0 100.0	0.0 0.0
D．他校種の授業を参観したり、乗り入れ授業を行ったりするための時間が確保できないこと	小：25.0 中：0.0	25.0 0.0	50.0 100.0	0.0 0.0
E．他校種（小学校⇔中学校）への乗り入れ授業をすることができる教員の人数が不足していること	小：0.0 中：0.0	25.0 0.0	75.0 50.0	0.0 50.0
F．他校種（小学校⇔中学校）への乗り入れ授業を行うための、教員の知識・技術や専門性が不足していること	小：0.0 中：0.0	25.0 0.0	50.0 50.0	25.0 50.0
G．他校種（小学校⇔中学校）の児童・生徒理解が難しいこと	小：0.0 中：0.0	0.0 50.0	75.0 50.0	25.0 0.0
H．小・中学校間で、指導方法や学習の進め方などが異なること	小：0.0 中：0.0	25.0 50.0	75.0 50.0	0.0 0.0
I．小・中学校間で、評価の考え方や方法が異なること	小：0.0 中：0.0	25.0 0.0	75.0 100.0	0.0 0.0
J．小・中学校の教員が持つ、それぞれの指導観や子ども観を理解するのに時間がかかること	小：0.0 中：0.0	25.0 0.0	75.0 100.0	0.0 0.0
K．異動があるため、児童・生徒を長期にわたって指導することができないこと	小：0.0 中：0.0	0.0 0.0	50.0 100.0	50.0 0.0
L．小中一貫教育に関心がなかったり、理解がなかったりする教職員がいること	小：0.0 中：0.0	0.0 0.0	50.0 50.0	50.0 50.0

その他、貴校および貴校が属する中学校区において、小中一貫教育を行う上で困難に感じることや課題がありましたら、ご記入ください。また、それを解決するために貴校や中学校区でとっている手段や工夫がありましたら、併せてご記入ください。

※ 省略（資料３参照）

Q16. 貴校の児童・生徒の状況についてお尋ねします。貴校には次のような児童・生徒はどれくらいいますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	かなり多い	やや多い	あまり多くない	ほとんどいない
A．当該学年の学習についていけない児童・生徒	小：0.0 中：0.0	0.0 0.0	75.0 100.0	25.0 0.0
B．授業中落ち着きのない児童・生徒	小：0.0 中：0.0	0.0 0.0	50.0 50.0	50.0 50.0
C．不登校の児童・生徒	小：0.0 中：0.0	0.0 0.0	0.0 100.0	100.0 0.0
D．経済的に困難を抱えている家庭の児童・生徒	小：0.0 中：0.0	0.0 0.0	25.0 100.0	75.0 0.0
＊ 次のE・Fは、**小学校**のみお答えください（N=4）				
E．中学校進学時に、学習に対する不安が見られる児童	小：0.0 中：－	0.0 －	75.0 －	25.0 －
F．国・私立中学校を受験する児童	小：0.0 中：－	0.0 －	0.0 －	100.0 －
＊ 次のG・Hは、**中学校**のみお答えください（N=2）				
G．小学校までの学習内容を習得していない生徒	小：－ 中：0.0	－ 50.0	－ 50.0	－ 0.0
H．学力不足により、希望する進路に進めない生徒	小：－ 中：0.0	－ 0.0	－ 50.0	－ 50.0

Q17. 貴校の児童・生徒の保護者や地域の状況についてお尋ねします。貴校には次のような保護者や地域住民はどれくらいいると思われますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	かなり多いと思う	ややいると思う	あまり多くないと思う	ほとんどいないと思う
A．教育熱心な保護者	小：0.0 中：0.0	75.0 100.0	25.0 0.0	0.0 0.0
B．学校の教育活動や行事等に協力する保護者	小：100.0 中：50.0	0.0 50.0	0.0 0.0	0.0 0.0
C．児童・生徒の家庭学習に協力する保護者	小：25.0 中：0.0	50.0 50.0	25.0 50.0	0.0 0.0
D．授業参観や学級懇談に出席する保護者	小：75.0 中：0.0	25.0 100.0	0.0 0.0	0.0 0.0
E．小中一貫教育に対して理解のある保護者	小：25.0 中：0.0	50.0 50.0	25.0 50.0	0.0 0.0
F．学校の教育活動や行事等に協力する地域住民	小：75.0 中：0.0	0.0 100.0	25.0 0.0	0.0 0.0
G．学校公開（オープンスクール）に参加する地域住民	小：0.0 中：0.0	25.0 0.0	75.0 50.0	0.0 50.0
H．小中一貫教育に対して理解のある地域住民	小：75.0 中：0.0	0.0 50.0	25.0 50.0	0.0 0.0

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

資料２　回答一覧

中学校区	学校名	回答者	Ｑ１　自校の児童・生徒の学力	Ｑ２　中学校区の児童・生徒全体の学習・学力の状況										
				Ａ．学力が高い児童・生徒が多い	Ｂ．学力が低い児童・生徒が多い	Ｃ．学力が高い者と低い者との差が大きい	Ｄ．全体として学力水準が低い	Ｅ．授業に集中できない児童・生徒が多い	Ｆ．学習意欲が高い児童・生徒が多い	Ｇ．学習習慣が身についていない児童・生徒が多い	Ｈ．家庭学習に積極的に取り組む児童・生徒が多い	Ｉ．小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い	Ｊ．学力不足のために、希望する高校への進学が難しい生徒が多い	Ｋ．中学校区内の複数の小学校間で、学力水準に差がある
Ｎ	Ｎ中	教頭	全国平均をやや下回る	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる
	ｎ１小	校長	全国平均をやや上回る	ややあてはまる	まったくあてはまらない	まったくあてはまらない	まったくあてはまらない	まったくあてはまらない	ややあてはまる	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	まったくあてはまらない	まったくあてはまらない
	ｎ２小	小中一貫教育担当	全国平均をやや上回る	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	とてもよくあてはまる	あまりあてはまらない	とてもよくあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない
	ｎ３小	教頭	全国平均をやや下回る	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる
Ｏ	Ｏ中	教務主任	全国平均をやや下回る	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	
	ｏ小	教頭	全国平均をやや下回る	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもよくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	

中学校区	学校名	Ｑ３　教育活動を行う上で重点を置いていること（３つまで）										Ｑ４　知徳体で最も課題としていること
		１．すべての児童・生徒に、基礎学力を身につけさせること	２．学校全体としての学力水準を上げること	３．学習習慣を身につけさせ、主体的に学習に取り組む児童・生徒を育むこと	４．基本的な生活習慣を身につけさせること	５．自分に自信や誇りを持てる児童・生徒を育成すること	６．児童・生徒が望ましい人間関係を築くことができるようにすること	７．郷土を愛し、地域に誇りが持てる児童・生徒を育むこと	８．すべての児童・生徒に、体力テストで一定水準の体力をつけさせること	９．正しい食習慣を確立させ、健全な身体を育むこと	10．生徒指導上の問題がない、落ち着いた学校生活を送らせること	
Ｎ	Ｎ中	○	○	○								知育
	ｎ１小		○			○		○				知育
	ｎ２小	○		○		○						知育
	ｎ３小	○	○					○				知育
Ｏ	Ｏ中		○	○				○				知育
	ｏ小	○	○	○								知育

中学校区	学校名	Ｑ５　学力向上に向けた取り組み								
		Ａ．放課後や休み時間等の補習指導	Ｂ．長期休業中の補習指導	Ｃ．習熟度別指導	Ｄ．少人数指導・少人数学習	Ｅ．学力が高い児童・生徒に対して、発展的な学習の機会を用意すること	Ｆ．自校の教員を活用したＴＴによる授業	Ｇ．ＩＣＴを活用した授業を行うこと	Ｈ．家庭学習の習慣を身につけさせる指導	その他の取り組み（自由記述）
Ｎ	Ｎ中	あまり実施していない	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	あまり実施していない	あまり実施していない	自由記述なし
	ｎ１小	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	自由記述なし
	ｎ２小	実施していない	実施していない	実施していない	実施していない	あまり実施していない	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	自由記述あり
	ｎ３小	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	あまり実施していない	実施していない	あまり実施していない	実施していない	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	自由記述なし
Ｏ	Ｏ中	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	あまり実施していない	やや積極的に実施している	あまり実施していない	実施していない	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	自由記述あり
	ｏ小	あまり実施していない	あまり実施していない	あまり実施していない	やや積極的に実施している	あまり実施していない	やや積極的に実施している	あまり実施していない	やや積極的に実施している	自由記述あり

中学校区	学校名	Ｑ６　教科担任制を取り入れている学年・教科（小学校）																																									
		１年国語	２年国語	３年国語	４年国語	５年国語	６年国語	３年社会	４年社会	５年社会	６年社会	１年算数	２年算数	３年算数	４年算数	５年算数	６年算数	３年理科	４年理科	５年理科	６年理科	１年音楽	２年音楽	３年音楽	４年音楽	５年音楽	６年音楽	１年図工	２年図工	３年図工	４年図工	５年図工	６年図工	５年家庭	６年家庭	１年体育	２年体育	３年体育	４年体育	５年体育	６年体育	５年外国語	６年外国語
Ｎ	Ｎ中																																										
	ｎ１小																	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○																
	ｎ２小																																										
	ｎ３小																																										
Ｏ	Ｏ中																																										
	ｏ小			○		○		○	○	○			○				○	○	○	○	○				○												○						

中学校区	学校名	Ｑ７　習熟度別授業（取り入れている学年と教科）（小学校）																												Ｑ８　小学校教員が中学生に対して行う授業（詳細は別紙）																		
		取り入れている	１年国語	２年国語	３年国語	４年国語	５年国語	６年国語	３年社会	４年社会	５年社会	６年社会	１年算数	２年算数	３年算数	４年算数	５年算数	６年算数	３年理科	４年理科	５年理科	６年理科	１年その他	２年その他	３年その他	４年その他	５年その他	６年その他	乗り入れ	中１国語	中２国語	中３国語	中１社会	中２社会	中３社会	中１数学	中２数学	中３数学	中１理科	中２理科	中３理科	中１英語	中２英語	中３英語	中１その他	中２その他	中３その他
Ｎ	Ｎ中																																																
	ｎ１小	○													○	○	○	○											ない																			
	ｎ２小	×																											ない																			
	ｎ３小	×																											ない																			
Ｏ	Ｏ中																																																
	ｏ小	×																											ない																			

中学校区	学校名	Q９　習熟度別授業（取り入れている学年と教科）（中学校）																				Q10　中学校教員が小学生に対して行う授業（詳細は別紙）																																	
		取り入れている	中１国語	中２国語	中３国語	中１社会	中２社会	中３社会	中１数学	中２数学	中３数学	中１理科	中２理科	中３理科	中１英語	中２英語	中３英語	中１その他	中２その他	中３その他	乗り入れ	１年国語	２年国語	３年国語	４年国語	５年国語	６年国語	３年社会	４年社会	５年社会	６年社会	１年算数	２年算数	３年算数	４年算数	５年算数	６年算数	３年理科	４年理科	５年理科	６年理科	１年その他	２年その他	３年その他	４年その他	５年その他	６年その他
N	N中	○							○	○	○						○				ない																															
	n１小																																																							
	n２小																																																							
	n３小																																																							
O	O中	×																			ある			○				○							○						○							○
	o小																																																						

中学校区	学校名	Q11　児童・生徒の学習支援や学力向上に向けて、小・中連携して実施していること											
		1．小・中学校間で教員が相互に授業を参観すること	2．他校種の教員がＴＴとして授業に入ること	3．他校種の教員が単独で授業を行うこと	4．通常の授業以外で他校種の教員が授業を行うこと	5．中学校区で児童・生徒の学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと	6．中学校区の教員が合同で、児童・生徒の学力についての分析を行うこと	7．学力面で気になる児童・生徒を特定して、小・中学校合同で支援に当たること	8．小・中学校合同で、系統性・一貫性の視点からカリキュラムを検討すること	9．小・中学校合同で、評価規準や方法について一貫性の視点から検討すること	10．中学校区で、小・中学校間の校時程の調整を図ること	11．授業時の態度や学習の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	12．校則や学校生活の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること
Ｎ	Ｎ中	○				○						○	
	ｎ１小	○				○			○	○		○	○
	ｎ２小	○				○				○		○	○
	ｎ３小	○				○						○	○
Ｏ	Ｏ中	○	○	○		○	○	○			○	○	○
	ｏ小	○	○			○	○				○		

中学校区	学校名	Q11　児童・生徒の学習支援や学力向上に向けて、小・中連携して実施していること										
		13．家庭学習のあり方に一貫性が持てるよう、小・中学校間で調整すること	14．中学校区で家庭学習の指導を統一したり系統性を図ったりすること	15．学習や生活に関する家庭向けの通信を、中学校区として発行すること	16．中学校区の小学校どうしで交流学習を行うこと（小）	17．中学校進学前の児童に、中学校の学習で必要な基礎的・基本的な事項を確認させること（小）	18．卒業させた児童について、中学校と連絡を取り合って学習をサポートすること（小）	19．中学校進学前に学力面で身につけておいてほしいことを、小学校へ伝えること（中）	20．学力面で気になる生徒について、生徒の出身小学校と連絡を取り合うこと（中）	21．小学校の保護者に対し、中学校での学習や生活について中学校の教員が説明をすること（中）	22．長期休業中などに、中学生が小学生の学習をサポートする活動を行うこと（中）	その他の取り組み（自由記述）
Ｎ	Ｎ中	○						○	○	○		自由記述なし
	ｎ１小	○	○		○	○						自由記述なし
	ｎ２小	○	○		○							自由記述なし
	ｎ３小	○	○	○	○							自由記述なし
Ｏ	Ｏ中	○	○					○	○	○		自由記述なし
	ｏ小											自由記述なし

中学校区	学校名	Q15　小中一貫教育における難しさ												
		A．小・中学校間で、連絡を取り合ったり情報を共有したりする機会が少ないこと	B．小学校との中学校との距離が離れていて、行き来に時間がかかること	C．小・中学校の教員が集まって話し合う時間が確保しにくいこと	D．他校種の授業を参観したり、授業を行ったりするための時間が確保できないこと	E．他校種への乗り入れ授業をすることができる教員の数が不足していること	F．他校種への乗り入れ授業を行うための、教員の知識・技術や専門性が不足していること	G．他校種の児童・生徒理解が難しいこと	H．小・中学校間で、指導方法や学習の進め方などが異なること	I．小・中学校間で、評価の考え方や方法が異なること	J．小・中学校の教員が持つ、それぞれの指導観や子ども観を理解するのに時間がかかること	K．異動があるため、児童・生徒を長期にわたって指導することができないこと	L．小中一貫教育に関心がなかったり、理解がなかったりする教職員がいること	その他の困難・課題（自由記述）
N	N中	少し感じている	かなり感じている	あまり感じていない	あまり感じていない	ほとんど感じていない	ほとんど感じていない	少し感じている	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	自由記述なし
	n１小	かなり感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じていない	少し感じている	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	ほとんど感じていない	ほとんど感じていない	自由記述なし
	n２小	少し感じている	少し感じている	かなり感じている	かなり感じている	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	ほとんど感じていない	ほとんど感じていない	自由記述なし
	n３小	あまり感じていない	少し感じている	あまり感じていない	あまり感じていない	少し感じている	あまり感じていない	あまり感じていない	少し感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じていない	あまり感じていない	自由記述なし
O	O中	あまり感じていない	ほとんど感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	少し感じている	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	ほとんど感じていない	自由記述あり
	o小	あまり感じていない	ほとんど感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	ほとんど感じていない	ほとんど感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	あまり感じていない	自由記述なし

中学校区	学校名	Q16　児童・生徒の状況								Q17　保護者や地域の状況							
		A．当該学年の学習についていけない児童・生徒	B．授業中落ち着きのない児童・生徒	C．不登校の児童・生徒	D．経済的に困難を抱えている家庭の児童・生徒	E．中学校進学時に、学習に対する不安がみられる児童（小）	F．国・私立中学校を受験する児童（小）	G．小学校までの学習内容を習得していない生徒（中）	H．学力不足により、希望する進路に進めない生徒（中）	A．教育熱心な保護者	B．学校の教育活動や行事等に協力する保護者	C．児童・生徒の家庭学習に協力する保護者	D．授業参観や学級懇談に出席する保護者	E．小中一貫教育に対して理解のある保護者	F．学校の教育活動や行事等に協力する地域住民	G．学校公開に参加する地域住民	H．小中一貫教育に対して理解のある地域住民
N	N中	あまり多くない	あまり多くない	あまり多くない	あまり多くない			やや多い	ほとんどいない	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う	ほとんどいないと思う	あまり多くないと思う
	n１小	ほとんどいない	ほとんどいない	ほとんどいない	あまり多くない	ほとんどいない	ほとんどいない			やや多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う
	n２小	あまり多くない	ほとんどいない	ほとんどいない	ほとんどいない	あまり多くない	ほとんどいない			やや多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	あまり多くないと思う	かなり多いと思う
	n３小	あまり多くない	あまり多くない	ほとんどいない	ほとんどいない	あまり多くない	ほとんどいない			やや多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う
O	O中	あまり多くない	ほとんどいない	あまり多くない	あまり多くない			あまり多くない	あまり多くない	やや多いと思う	かなり多いと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う
	o小	あまり多くない	あまり多くない	ほとんどいない	ほとんどいない	あまり多くない	ほとんどいない			あまり多くないと思う	かなり多いと思う	あまり多くないと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	あまり多くないと思う	かなり多いと思う

資料３　自由記述一覧

		Q５ＦＡ（学力向上を目指した取組）	Q７ＳＱ「その他の教科」（小学校における留熟度別授業）	Q８（小一中乗り入れの教科・時間数）	Q９ＳＱ「その他の教科」（中学校における習熟度別授業）	Q10（中一小乗り入れの教科・時間数）	Q11ＦＡ（小中連携した学習交流）	Q12（中学運営時の引き継ぎ）	Q13（日常的な情報交換）	Q14＜基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるために＞	Q14＜思考力・判断力・表現力等を育成するために＞	Q14＜学習意欲を向上させるために＞	Q14＜学習習慣を身につけさせるために＞	Q15ＦＡ（小中一貫教育における困難や課題）
N	N中				中１～中３の数学 中３の英語			小学校６年の担任と中学校がいっしょになって「１のクラス編成」をしている。	年に７回の小一一貫会議の中で、知・徳・体についての情報を話し合いをしている	学習の記録の確認（保護者からのコメント）		授業のねらいやまとめのキーワードなど、同じように板書している	高原っ子幸せになる10の法則をつくって実践している。	
	n１小		小３～６：算数											
	n２小	美術・常熟活動による「朝の学習」にも取組をやっている。また、美術活動で流書も行っている。						年度末に中学校区で担当職員が集まって情報交換をし、引き継ぎ事項の確認をすることで、中学校の学級編成やその後の指導に生かしている。	中学校区単位では、特に行っていない。一貫教育推進会の際に、町全体の学習状況について、校長・教頭が教育委員会と打合せをしている。	問題解決的な学習の課題を明確にし、めあてとまとめを設定することもに、構造的な板書に取り組んでいる。	問題解決的な学習の課題を、「導入」、「めあて」、「自己表現の場」の３段階でとらえ、その いずれかの段階に「自己表現の場」を設定している。また、その際にＩＣＴを活用している。	授業のねらいやまとめのキーワードなど、同じように板書している	「家庭学習の進め方」を作成し、家庭に配布している。また、「家庭学習３のルール」の定着を目指して取り組んでいる。	
	n３小							学習面・生活面の状況などについての情報や保護者についての情報交換を行っている。	定期的に研修の時間を設定し、情報交換を行っている。	9年間を３期に分け知育における重点目標を立てることもに、各校で実施している情報学力テスト（NRT、CRT）の分析、活用を図っている。	小中学校の系統性のある授業「めあて」「まとめ」をできるだけ設定した展開をするなど、「問題解決的な学習」による主体的活動をもたせるようにしている。	「家庭学習の進め方」を作成し、家庭に配布している。	「家庭学習３のルール」を定着を目指して取り組んでいる。	
O	O中	全校生徒が14名と少ないので、意欲せずにもらえる板書中心の「朝の学習」という20分間の自習で広く授業（講義式）を実施している				小３・国語、社会（各週１時間） 小４：算数（週１時間） 小６：理科・英語（各週１時間）		6年生の学級担任が、中学校に来て、学習面、生活面についての引き継ぎをしている。	小中合同の職員研修を月に１～２回設定し、知育・徳育・体育の三部会に分れて研修を行っている。	少人数の学校であることを生かして「個に応じた指導」を常に行っている。	小中合同の研究主題の前期に『「知育」・「徳育」・「体育」・「健育」の伝え合う活動を通して「人とかかわる」と設定し、「伝え合う」という部分を重点的に取り組んで、教育活動に取り組んでいる。	中学校教師の小学校への乗り入れ授業を通して「中学ギャップ」の軽減や、基礎学力アップの取り組みを行っている。	小中一貫教育を行っているのは、人口減少、過疎を理由に同じ町内の中学校へ入学する生徒が少なり、生徒数が減っきていること。	
	o小	生活診断表の活用及び分析							小一一貫教育における、小中合同研修会の知育部会で、情報交換や授業研究、ＩＣＴ技能等を行っている。（年10回程度）	「話す、聞く、書く」学習技能の系統表作成	中学校教員による小学校授業への乗り入れ			

（2013年10月８日受理）